

「話がしたい」

金曜日の夜。玄関を開けると、二か月前に別れた杉下航が立っていた。航だと分かった瞬間、私は扉を閉めようとした。

「待って」

「帰って！」

扉の隙間へ航の靴が差し込まれる。押し返しても動かない。航は申し訳なさそうに目を伏せたまま、肩で扉を押し開けた。

「ごめん。でも、話があつて」

「やめて。勝手に入らないで！」

「ちゃんと話してくれたら出ていく」

航が身体を滑り込ませ、背後で扉を閉めた。逃げようとした私の手首を掴み、そのまま腰へ腕を回す。

航は昔から、人の顔色ばかり窺う人だった。付き合い始めたときも、初めて私の部屋へ来たときも、何度も「迷惑じゃない？」と聞いてきた。

今も視線は頼りなく揺れている。けれど、私を抱き込んだ腕だけは頑なに緩まなかった。

「離して」

「離したら、俺を追いつすでしょう」

「当たり前だよ」

「だから離せない」

腰へ回った腕は震えていた。それでも力は強く、振りほどけない。航は私を抱え込むように玄関から廊下へ進んだ。

懐かしい匂いが近すぎる距離から押し寄せる。

胸が痛む。別れてから消したはずの記憶が、ひと息ごとに戻ってくる。航は靴を揃え、慣れた様子で廊下へ上がった。

「別れようって言われて、分かったって返した。でも、本当は全然分かってない。文香が俺を嫌いになった理由も、何も」

「理由は言ったでしょう。もう好きじゃないって」

「じゃあ、俺を見て言って」

顔を上げると、航と目が合った。

いつも自信なさそうに伏せられていた目が、今日は私だけを見ている。逃げられずにいると、彼が一步近づいた。

「文香。俺のこと、もう好きじゃない？」

「……好きじゃない」

「嘘だ」

「どうして航に分かるの」

「分からない。だから、二か月ずっと考えてた。文香が俺を嫌いになった理由を、毎日」

また一步、距離が縮まる。

「仕事が忙しいのに会いたがったからかもしれない。連絡しすぎたのかもしれない。文香の部屋に自分の物を置きすぎたのかもしれない。勝手に来年的話をしたから、重かったのかもしれない」

航の声は震えていた。

「でも、どれだけ考えても、文香を諦める方法だけ分からなかった」

「航……」

「別れてからも、朝起きると文香に連絡しそうになる。仕事が終わったら、ここへ帰りたくなる。文香が誰かと付き合うかもしれないって考えると、何も手につかなくなる」

航は一度言葉を切った。後ずさった私を追い、壁際まで距離を詰めてくる。逃げ道を塞ぐように身体を寄せられた。

「俺が触っても、文香は何とも思わない？」

「お、思わない……」

「じゃあ、確かめる」

航の顔が近づき、唇を塞がれた。

「んっ……♡」

背中が壁へ当たる。驚いて押し返そうとした手首を、航にまとめて掴まれた。

両腕を頭の上へ持ち上げられ、手首を壁へ押しつけられる。顔を背けると、顎を掴まれ、無理に航のほうへ戻された。

「ちょ、っと……航、やめ……♡」

「やめない♡」

「別れたんだから、こんなことしないで……っ♡」

「別れたままにするつもりがない♡」

「勝手に決めないで……♡」

「文香が勝手に別れたんだから、今度は俺が決める♡」

声はまだ弱々しい。それでも手首を放さず、もう一度唇を重ねてくる。
ちゅっ♡ちゅうっ♡くちゅっ♡

「んう……っ♡ふ、う……っ♡」

唇の隙間へ舌が入った。逃げる舌を追いかけられ、絡め取られる。
くちゅっ♡ちゅるっ♡ちゅぷうっ♡

「んんっ……♡んうう……っ♡」

胸を押していたはずの指から力が抜ける。航はそれに気づき、掴んでいた手首を壁へ押しつけた。

「文香、もう力が抜けてる♡」

「ちが……っ♡」

「嘘だ♡」

否定ごと塞ぐように、また舌を押し込まれる。

くちゅっ♡ちゅるるっ♡ちゅぷっ♡

「んっ♡んうっ♡ふぁ……っ♡」

「二か月も触れなかった。もう離さない♡」

「やめ……っ♡」

「やめない♡」

首筋へ唇が押しつけられる。逃げようと肩を捻ると、掴まれた両手首が壁へ強く縫い留められた。

ちゅっ♡ちゅぷっ♡ちゅううっ♡

「ひゃっ……♡ま、待って……♡」

「待たない♡」

耳の下へ歯を立てられ、すぐに強く吸われる。

かぷっ♡ちゅううっ♡ちゅぷっ♡

「んっ♡あっ♡やぁ……っ♡」

「ここ、好きだったよね♡」

「し、知らない……っ♡」

「俺は覚えてる♡」

顔を背けても、顎を掴まれて首を晒される。赤くなった場所へ続けて吸いつかれた。

ちゅぷっ♡ちゅううっ♡ちゅううっ♡

「ひゃあっ♡そこ、もう……っ♡」

「明日、隠せないくらいつける♡」

「やめて……っ♡」

「嫌だ♡」

短く言い切られ、胸が跳ねた。航は首筋へ跡を重ねながら、腰を壁へ押しつけてくる。

ちゅっ♡れろっ♡ちゅぷっ♡

「んあっ♡航、しっこい……っ♡」

「二か月分には足りない♡」

ブラウスの裾から手を差し込まれた。冷えた指が脇腹を滑り、背中へ回る。

かちっ。

「だ、駄目……っ♡」

「駄目でも触る♡」

「私は、戻らな……っ♡」

「戻ってもらおう♡」

外れたブラジャーの内側へ手を入れられ、胸を強く掴まれる。

むにゅっ♡

「ひっ♡あ……っ♡」

「逃げないで♡」

航はコートを床へ脱ぎ捨てた。逃げようとした身体を抱え上げられ、そ

のままソファへ押し倒される。背中が沈むより先に航が覆いかぶさり、両手首を片手で頭の上へ押さえつけた。

ブラウスのボタンを外され、ずらされたブラジャーから胸が露わになった。

「見ないで……っ♡」

「今日は隠させない♡」

胸へ顔を埋められ、片方の乳首をいきなり口へ含まれる。
ちゅぷっ♡れろれろっ♡ちゅうっ♡

「あっ♡んうっ♡やあ……っ♡」

舌で転がされるたび、身体がソファの上で跳ねる。反対側も指で摘まれ、

逃げる動きに合わせて強く捻られた。

こりっ♡こりこりっ♡こりっ♡こりこりっ♡

「ひゃあっ♡あっ♡そこ、らめ……っ♡」

「声、我慢しないで♡」

左右を同時に責められ、腰が勝手に浮いた。航は口を離さず、押さえつけた手首へさらに力を込める。

れろっ♡ちゅぷっ♡こりこりこりっ♡こりこりっ♡こりこりっ♡

「んっ♡あぁっ♡航っ……♡」

「もっと呼んで♡」

「やっ♡ひぁっ♡あ、あぁ……っ♡♡」

吸いつく乳首を入れ替えられる。唾液で濡れた乳首を舌先で細かく弾かれ、もう片方は爪の先で転がされた。

ちろっ♡れろれろっ♡こりこりっ♡こりっ♡こりこりっ♡

「ひゃんっ♡やぁっ♡もう……っ♡♡」

「まだ始めたばかり♡」

胸を両手で寄せられ、左右の乳首を交互に舐められる。

れろっ♡れろれろっ♡ちゅぷうっ♡

「あっ♡あぁっ♡航う……っ♡♡」

「その声、ずっと聞きたかった♡」

膝が脚の間へ押し込まれた。閉じようとしても、腿を強く割られて逃げ

られない。

「待つて……っ♡ここじゃ……っ♡」

「寢室まで行ったら逃げるだろ♡」

「逃げる……っ♡」

「だから、ここで全部する♡」

航の手がスカートの裾へ触れた。

「駄目……そこは、本当に……♡」

「もう遅い♡」

スカートを一気に腰まで捲り上げられる。慌てて脚を閉じようとしても、航の膝が間へねじ込まれた。

「やあ……っ♡見ないで……♡」

「脚、開いて♡」

拒む間もなく腿を左右へ押し広げられ、下着の上からクリを強く擦られた。

「ひっ……♡あっ♡」

くちゅっ♡くちゅくちゅっ♡

布越しなのに、濡れた音がした。

「文香、もうこんなに濡れてる♡」

「違う……っ♡」

「嘘つき♡」

指が下着の上からおまんこの割れ目をなぞる。

くちゅっ♡ぬちゅっ♡くちゅくちゅっ♡

「あっ♡んう……っ♡そこ、擦らないで……♡」

「何度でも触れば、認めるよ♡」

「やっ♡ひぁ……っ♡」

下着の端へ指をかけられ、抵抗する脚ごと乱暴に引き下ろされた。

「待って……っ♡脱がせないで……♡」

「待てない♡」

膝まで下ろされた下着を、航が片手で抜き取った。両脚を持ち上げられ、濡れたおまんこが彼の目の前へ晒される。

「見ないでえ……っ♡」

「文香、すごく濡れてる♡」

「言わないで……♡」

「もっと声を聞かせて♡」

「や……っ♡んう……♡」

航の指がおまんこの襷を開き、剥き出しになったクリを掠めた。

「ひゃあっ♡」

くちゅっ♡くりっ♡くりっ♡くりくりっ♡こりっ♡

「あっ♡そこ、駄目……っ♡」

「駄目でもやめない♡」

指先で包まれ、円を描くように擦られる。

くり♡くりくりっ♡くちゅっ♡くりっ♡くりくりっ♡こりっ♡

「んっ♡ああ……っ♡や、やあ……♡」

「逃げてでも無駄♡」

「ひゃっ♡あっ♡ま、待って……っ♡」

腿を掴む手は緩まない。脚を開かされたまま、逃げる腰を追って指がク
リへ押しつけられた。

くりっ♡くりくりっ♡くりっ♡くりくりっ♡こりっ♡

「ひあっ♡んっ♡ああ……っ♡」

「もっとしてほしい身体になってる♡」

「ちが……っ♡やあ……っ♡」

「文香の身体、正直だね♡」

「航のくせに……そんなこと言わないで……♡」

「俺のくせになって、何？♡」

「いつも、何も言えなかったくせに……♡」

「だから別れたの？♡」

突然の問いに、息が止まった。

航は指を動かしたまま、私の目を見ていた。

「俺が何も言わなかったから、文香は不安になった？♡」

「今、聞かないで……っ♡」

「今じゃないと、また逃げる♡」

くりっ♡くりくりっ♡くりっ♡くりくりっ♡こりっ♡